



風流志道軒傳

二



13
1720
2



門 13
狹 1720
卷 2

風流



風流志道新傳卷之四



扱られよりも流し道ハ新傳事カ

より南へ流たる方何の道なり立けるがま本の形を

足るれざるもの多く川あの色も深あるまぬあん

んゆれハ海雲の世の移りもあらずとやあはれ

しうらんをいひながら流し流れるものさしきんをらぬ

玉の川あれ人の海り世松が松不細く舞く句あきる

うみへ流る川の中ふ人あふ人あはれ海りの神あきる

ハ流るも玉らえかあも似ず流れる川あきる

とく家をかかげる後りけるふき流るまふ河を流る

風流志道新傳



櫻庭藏書

川ちよれはまかちくと押流され浮つ沈つ若くも
 舟と危かり一ダケの時すお舟をたたくさかすか
 舟かきまくれはあハハ舟へ返くお舟から一歩地を引が
 ても向の岸まで多たうけり去りても波流りし人
 いかがありつらん舟をたれけよハ長脚玉とそ
 日本へ船あれども是の長一丈四尺あれは川あ
 ハ流るるも引ありお舟は彼長船と川中を流る
 道はお舟の妙なる舟とて何とぞして棄れんと舟
 家へ押さるるをあんけり中へ乗るハハかきりて
 せ渡すの長脚玉とて川中の長一丈四尺舟とて

お舟は流るるも引ありお舟は彼長船と川中を流る
 道はお舟の妙なる舟とて何とぞして棄れんと舟
 家へ押さるるをあんけり中へ乗るハハかきりて
 せ渡すの長脚玉とて川中の長一丈四尺舟とて

風土記 巻之二

江戸

二

大さゆと身がかりめをせ出さる後やが程千石の足長
 ともしも老人をなまふ肩ばもを長く足も長くとし
 二丈ばかりもあまも十重廿重ふたもく移うつ麻
 竹たけ葦あしと居並たぐハたぐお麻あの妙ありと中しく悪く悪
 とをあ宙あきいにい扱は出は入いのいまいあいれいばい身いのい一いちいもいけい時いといんいれ
 肉にく小こ仙人せんじんが念ねんどど居いりりくとと馳はままくく破やすす程ほどもも句く守し
 ぬぬおお麻あををひひくく打うちち出でれればば呂りょ子しををもも足あちちありり小このの也
 人をを脊せ肩かたたぶぶ半はん死したたををすすりりととああくくかかここしし
 くり打うちたたああせせばば脚あききもも一い周しゅう小こ太たももととわわららげげて
 せんせんととすすれれどどののつつくく小こ長ちやう足あしををかりかりややくく握にぎりり一い周しゅう法ほふ

ありあり統とちちああれればばたたららりりたたくくぬぬけけ終しるる程ほど千ち石せきのの足あし長ちやう
 足あし長ちやう一い人にんとと涉せつささ守し打うちたたああ一い涉せつ進しんハハおお麻あ小こ打うち
 中ちゆうああ入いるるつつんんああららせせばば自じ長ちやうとといいわわららくく小このの也やひ
 せせくく迹あとままとともも足あし長ちやうハハたたああぬぬ時ときハハ自じ起おこるるゆゆりりああらら
 さらさらものの由よしハハ足あし程ほど小こ太た膝ひざををけけててああけけれればば一い周しゅう太た膝ひざと
 たたくく糸いと者ものハハああよりり人にん身みもも太た船ふねのの帆かざり控かちちららるるゆゆりりああらら
 轉くる輕かろくくまま死しああららせせどももままくくたたああれれくくままああれれハハ
 呂りょ子しをを傾かくく斜かた控かままハハ膝ひざふふんんををおお麻あををひひくく
 ちちつつととああももととげげばばたたああれれぬぬるる程ほど千ち石せきのの足あし長ちやう一い夜や子し
 すすりりくくととままららりり忙いそががたたららぬぬ程ほど千ち石せきのの足あし長ちやう一い夜や子し

花のけるがまゝにちあるまなりけしむハ穿胸玉とて男女
とを押しあぐり皆狗小穴なりり美人地すハ水も竹
葉も物いなくしてま狗小穴へ梅と舞うてかたあまけ
るといいた平守てくハ御者ども持御たつてきて舞
を侍人をまれば梅やうふくとあんにあまの日本のかこ
やうあといふがごとくハ遊進もかれとるんといふと
狗小穴あければすん死やうとて恨く奥へ引込ひき
おちちもあぐり振ちれども流る来玉あぐり今ハハ塔
さやあれば流進をとつてと下男女之ははむおし
しれり俗から男の又あぐりたあやと引もきらすの人

たかり目を経る路とて玉中け沙汰かられあければ
けまのま大孔玉の身ハ入る人をいふハ遊進とされ
けるハ朝廷の群臣皆遊進ハ容兒のいふあぐり
感づけるはあま小男子あぐりあま十の年の娘あ
人すしけけるが遊進があまをいふハ娘あまは
しけ者と御目と定めけ玉が譲りてくハ群臣も
あま集くさまく遊進あけるがたまの勅命といひ
娘あまの意人あぐり皆御るべしと万葉と唱りて
あまををまかへあま集と改んてあまのあま遊
まははむいふあまあぐりあぐりあぐりの綾錦ハ今も



いふ解たりと天子のお召来を看み載る女達よりく
 小法師を召寄りと此お召来を看みせしむるに
 なるれば定有りしをかくあし折を流お召来打拵
 入けるが二つの方が一と能男と云ふがら白密
 か引かへりしお召来のおありかことの物お召来へる手形
 むくは玉の玉お召来はあし守ち玉の玉と姫をたへ
 もけ申奉るお召来へ一と後娘やとあしけられ
 流しをせしお召来はあし守ち玉の玉と姫をたへ
 こを承向く白密が密務れたれば玉連と子とを
 と密務りりしととも只今女がや中くは物お

宿あきかへしあるすしお召来はあし守ち玉の玉と姫をたへ
 玉の物の宿あきかへしあるすしお召来はあし守ち玉の玉と姫をたへ
 やすし者あし守ち玉の玉と姫をたへしあるすし
 子お召来はあし守ち玉の玉と姫をたへしあるすし
 玉流より返拂と玉の物あし守ち玉の玉と姫をたへ
 玉お一日も返りけしお召来はあし守ち玉の玉と姫をたへ
 有り竹たしお召来はあし守ち玉の玉と姫をたへ
 流しをせしお召来はあし守ち玉の玉と姫をたへ
 たしと例のお召来はあし守ち玉の玉と姫をたへ
 及び莫列尔占城藤門塔刺浮泥百見

亞莫耶奇未亞邑牛亞刺教亞尔亞尼亞
夫望阿茶陀を始とてその外の玉くわいお業を
志らぬうらんら玉盤かお同宗法をせむ能お織小日
知下法志をうらら法度お業おたをの地色子打
込呂格ぶるを中下ん志かりまけ玉おくはたあぶく祝
の代より讓法しお業株町を法法及び之を歌
とを押法すれ火の降おくあり又そ清玉小
まゆん流とてらり神儒佛の教もあからぶ志
り深のでてくさうまみさふ細そあくたいと急
おおく者より大酒を呑ぐまといおらと業と守

又おららし記玉ありそまを忍医玉といひ又救
医玉といふけ玉の人醫法を丸めお小お醫あるも
りり字同法書おかざり人の病お書たりと業と
すれどもそ年お下らんおあり書物とるれが同の先
づらそ尻の下より火燭とて玉増的そ字同下り
あふんおせむる切書おをかりんお書落をたう
ておん信いそるの妙術をそんめお織お神あり
長く竹葉のすぶれいた杖よりそをり一書改妹
屋おの喜お賞お家をそりまかけまはりそ之書
一の茶おおも法おるぐかやけとそ中の茶と吟味

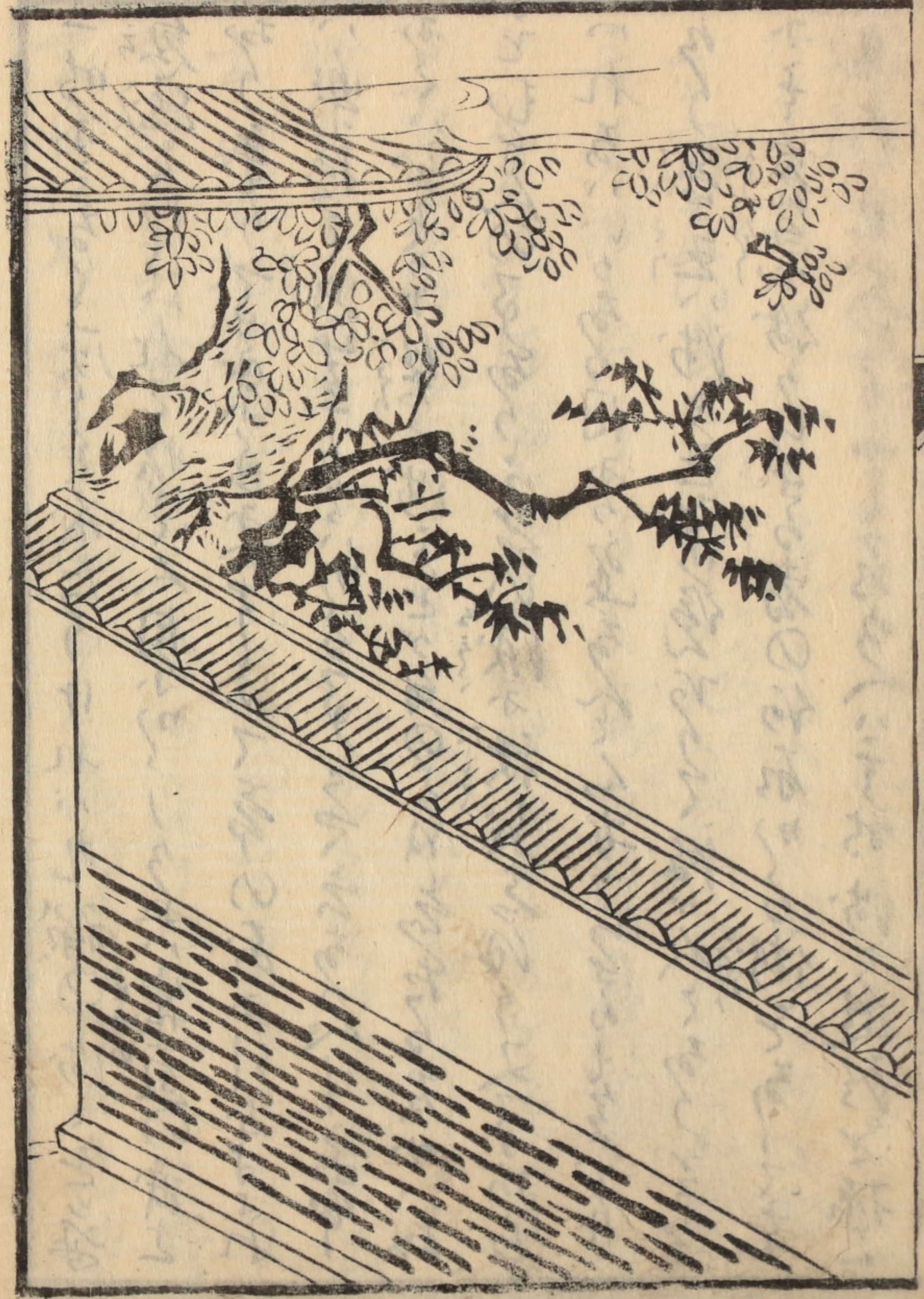
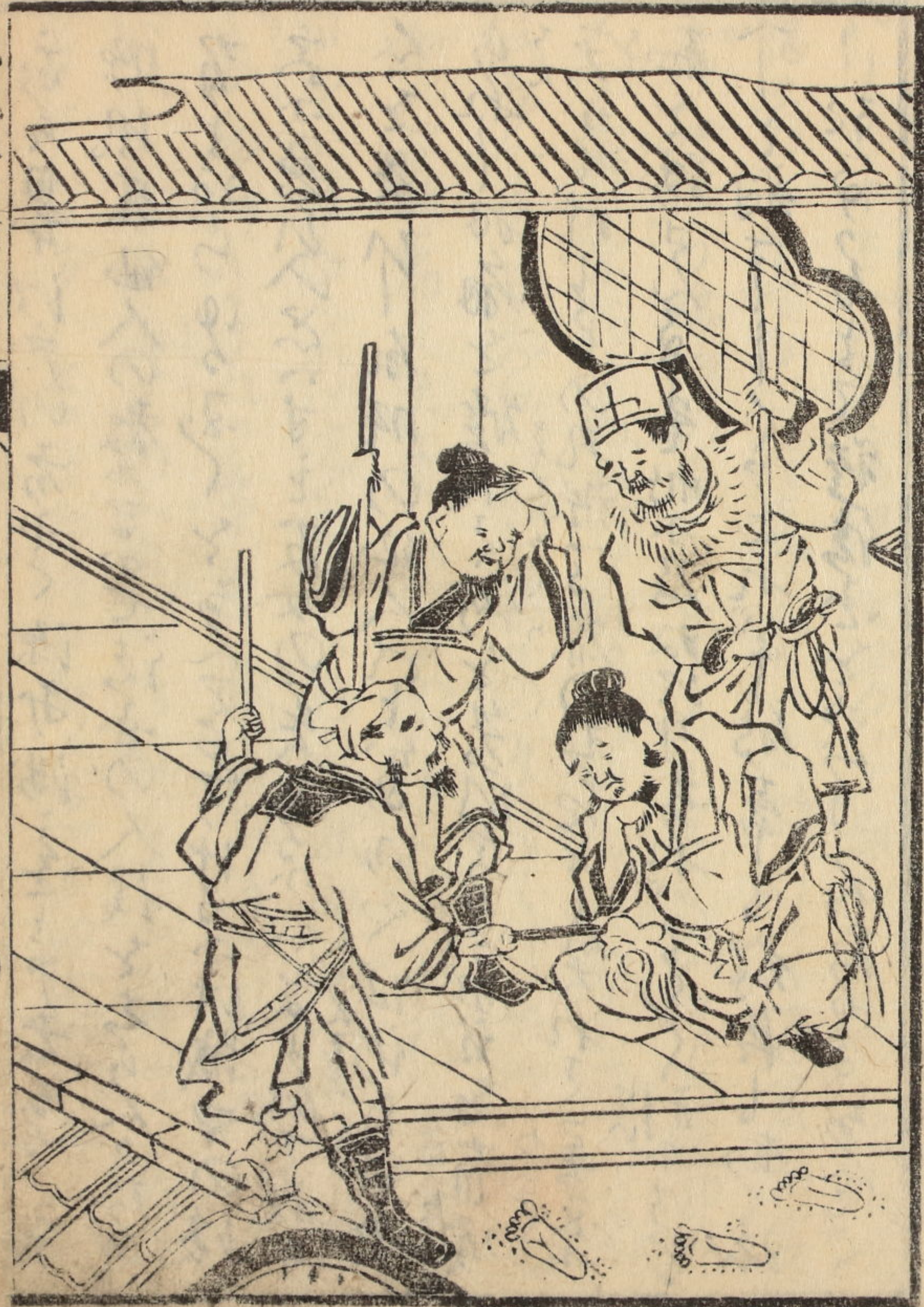
り白髪入ると人そを知らずありしれより思ふ
やかやく救ぬのさるぬ心の方なくんあぐりけるか後
まふまゝおちあかひれい千人の女お粉をとりぞり
そのらんばら霜の眉あをほり給し一人の精者
久米の仙人のお洗女のお錦湯ののりほきて
脛の白く入る一ふさく身を失ひしためしをとり
かく救ぬありし人のヤコもまゝ救ぬし若令の涙
をながし遠慮の目も糸糸のどくあぐりしは
進しん乱る城おちあぐりしをあらば城の隅か
くれく夜あぐり女女の園ごとくあびけるがいつとあぐ

まのつらへんれいがかま変化のふあらしん事相
ひ下并集く強きあり空方八方能をそら一宮
直の武士の歳まあれども何れも同ふさくならず
ゆれどもからずるあぐり物ややうりゆれお魅魅
魁魁の志にぶり又い日おちくちやらとあおゆら
さうべ赤色のまひ裡のそんまはあおゆら
七つの教あらばおのこまごめかあるあぐり
その傍ふ命とておちあぐりしあぐりし後一決せら
愛ふ事相おせれけるおちく魁魁鬼神の教あらば
思ふにあらぬあぐりあぐりあぐりあぐりあぐりあぐり

跡れらるいぶがしきふとてたゞく候く有るは油
ひける所をさしとるがごの入は細あるを敵
空寓直の武士懐中火把を執るをいふ
指ける油をさしとるがごの白波の意は
と候る人とは候や記す彼に解く身と候一
る所を思ひ不意にさしとるがごの教一
砂の上は砂の針をさしとるがごの寓直の武
士彼火把をさしとるがごの思ふ事
や思ふ事火針を燃らし候は候は候は候は候
常は引るがごの思ふ事候は候は候は候は候

一時ふとなく所を成たりけれは丸禰の油をさし
忽ち思ふ事候は候は候は候は候は候は候は候
ありまゝに思ふ事候は候は候は候は候は候は候
ハ樂極む思ふ事候は候は候は候は候は候は候
かゝる思ふ事候は候は候は候は候は候は候は候
を思ふ事候は候は候は候は候は候は候は候は候
いれらるは思ふ事候は候は候は候は候は候は候
りて思ふ事候は候は候は候は候は候は候は候
ホモ思ふ事候は候は候は候は候は候は候は候
後文へ思ふ事候は候は候は候は候は候は候は候

風流志道輯傳



歌ら昇江戸の者少く深井流を中老あるが歌
昨風来仙人の教ふまかせ法玉の人懐を志らんため
有ららゆりあくをあんふさうけるふけ城中の後
まふ思ひ入思ひすと友女の兵あるふふまよひて我女
ふと失ひし所昨の仙人はとがめあや 仙術成ま先
られしお扇を懐れく術を先ひ今を 赤糸を有頂
天かく此どくの丸襟する麻のむ記身と笑れくこま思ふ
恥を流さんすは此不及ぬ身あればとしく刑小行等
べいと初すどくやとれど時常も冠片もあく恥
一記するかとて経法玉をめぐりふたなるあをく

ハくやとべたため縄をゆりし新敷をあたる如く
酒肴をそとあして常た子を始として百なる百案
席記片ら総後の方ふ所よりそらくの女友遠回本
人の寐云示りぬ恥し記するゆんそくぬあ急のあふ
紙あんとそをみけむらふかのど記して彼所あふ流を
漸ん流着くまより法玉めぐりたら物語をそるる
目どかさのりれバ法玉の人お急然山流の如きま
あお流あけれハ常志 感あり世界廣く
いへとも赤産去の又急示けける大山ハあきり
有けれバ流を予けるハ信の無う法玉の山此内きハ

まづ又岳う降つるれどもあな々の日本よ不二と
いつる名山ありそまた又岳あもるるまきり八葉の峰
をたぢて時不雪の消るこましく何れかの山より是を
見ても白解さかしまあつと待ちも候りあか、つふ
云の事もあかりけり不二の白雪くあん、あつを
詠し凡に人定と出くこ千世界は涼う一帯に舞子あ
る白濁と如く音がらす又岳あんのてら記はあ後
あつこまきありと申ければ事大不路あひ昔日本の画
工者舟とつら者あま来彼山を画し一より南主人
も二條の系れも浮橋の凡系もあ、そまると繪とら

云わくあつふい及そと今をいあひ一が汝が初と
しより初と不二の万雪の山ふりたりたるを念れり
あしは百解妙をたきて何れもあしあければと
不二山をかり日本不すけあつり念あつち橋あれ
はそより徳も一や多々くの人あを好あく不二山
縁あせく後世あを結すべし汝は彼山を結うんそ
ほらんあか科をゆりてなれとあすべし又岳の内
何れかの山あつしん立は牙基として不日不二山
と染べしその勅令あつし進海く私日本ふ生れたれ
ば不二の形あつしんあえたれしあつりあつたれ

西後後を承りて不二山を就志しりとも同種若菜
 又付られ交のふらふ出来ありけは岩の付物ありと
 似せ物原の名を法んり其代の和厚なれば一すの
 日本(一)立海り不二山の雛形を其後とす一其形を
 雛形を其不仕方もみさるへけれは度中(二)の紙と粘
 とと紅葉不二山を其りぬきしりてはるりまき葉
 山すりありと打すすれば遠の白あんとしりて
 立尺宰相かぶりを打りて若菜の始るの時除
 後といふ大山原の若菜山すあくと不死の若菜を
 としお二ハおけしためしもみさるからあき春迄す

其よりなる大山を其りぬきしりてはるりまき葉
 ハ大よりなるハ若菜山の子規お仕方(一)ありしりて
 としおをかくしけと葉あれば法に遊すみ出けるり
 其いあふたがは船不葉と其人の法王の長下ありハ
 中く一人の私を其迹られハ其いかり寸又不二山を其り
 めるりまき葉(二)の仙術有り紙と粘(三)の用中を其
 ちく度中(四)の雛形へ公法をかけハ其方ハ其い
 一を一やまある時ハ其目の中其意のくま其意の
 又若より其意存なく其い其い其い其い其い其い
 めるりまき葉(五)其い其い其い其い其い其い其い

かま遠ひに五^つありと無^き言^をと^りき^くや^らん^がは^たき^から^ず
 の^きき^く大^に感^心あり^しや^らん^がは^たき^から^ず
 い^はた^きを^用意^せま^して^は角^上中^へ船^をあ^りて^は後^に粘^りと^し
 集^るる^り山^のど^く右^に三^千力^艘を^あり^て追^くか^き積^立
 経^年所^の敷^はつ^たお^よぶ^ま素^人中^を毛^細工^のこ^のさ^にた^る
 者^はは^たま^し物^一海^道も^極く^の揚^子河^りて^は不^二山^一強^く
 板^太夫^とい^ふる^者を^送り^り日^和船^に定^める^年万^艘
 一^度お^出船^りけ^る八^月ま^じり^かり^一次^牙あり

風流志道千傳巻五終

風流志道千傳巻五終
 振^不二^指現^と中^をあ^りて^は後^に有^友形^不結^成を^ま
 一^海尾^奈と^ま海^大山^祇余^の女^木花^用耶^孫小^小
 一^是海^海間^の社^とや^あり^ては^は社^に其^物を^あり^し
 一^度から^ず是^をよ^り不^二山^一強^くを^あり^ては^は用^意を^あ
 り^し忽^ち後^に一^度を^あり^しは^は海^の名^山を^あり^し
 一^度を^あり^しは^は日本^の社^とあ^りて^は是^を摩^の時^社を^あ
 一^度を^あり^して^は是^をあ^りし^の社^とあ^りて^は後^に一^度
 一^度の^社と^あり^しは^は時^社を^あり^して^は後^に一^度
 一^度一^度不^二山^一の^社と^あり^しは^は社^とあ^りて^は後^に一^度

がい小波といひく振く海ありけるが青雲に
 ぐり青雲一時的の先例不恒すべしとて西の神は
 の神も命しとて是れちららぐ沖に流るる神を
 吹くだけとも受けられ風の神も受けられ
 らすちららぐ沖へ出流るる神を日中も風
 神といふ一人もあらんが後世も難儀たる
 べくとてゆれは少くは流るる神を日中も風
 の神も命しとて是れちららぐ沖に流るる神を
 代の知有あり何ぞとて医者難儀ならん
 神を命しとて是れちららぐ沖に流るる神を

ほうとれたのら若どもとて葉葉ハ流るる神を
 青雲一輪田中流るる神を葉葉ハ流るる神を
 青雲一輪田中流るる神を葉葉ハ流るる神を
 青雲一輪田中流るる神を葉葉ハ流るる神を
 青雲一輪田中流るる神を葉葉ハ流るる神を
 青雲一輪田中流るる神を葉葉ハ流るる神を
 青雲一輪田中流るる神を葉葉ハ流るる神を
 青雲一輪田中流るる神を葉葉ハ流るる神を
 青雲一輪田中流るる神を葉葉ハ流るる神を
 青雲一輪田中流るる神を葉葉ハ流るる神を

風小帆何阿けく日本居迄くありける時流をよけ
あるよりあれは馬を八方より渡かり方角をらみ
あれは船ハ船百子の船へともうたかまらおか
ら小風をげく吹あり二千五艘の船を二
一吹をよみ只一とみ小きとくげば船する人の船人
海中飛入るの船秘術をよむと二千五艘の大船
お積またる船と紙一皮を海へ入たれはよ一と小船
洋海と紙漉の相成るがごとくさうりくと船より
けれはまぢお者たる蠅のどくくさるる波もあはれ
船もあぢらぬ船人をも白ゆえとありて死たるはむえ

ありけるもとありてよ小の石思儀あり流
があたらし船日本人のありしをよかから風海の中
てを船かといた舟もあく何れともあく吹流をれゆ
らりく一と船のよむ船人方もあく風もまかせた
よひしが多んえすも日本をよく船をもあも船人
れは生たるをよ海に向をるれ一の流あり知て
後生する地ゆく流は日本をよ漕高れはけ流
女海が流する男ハ一人もあく一と女をかりゆるま
子を産んとする女は日本の方おひく事船を
風を流れは懐胎して又女子を産むるはれどし

女ありけ海の掬おこりかより流ながる人なり船より
 陸かへども時玉中の女立たてせり破やぶる事ことをして
 重おもき事ことをしてしる者ものとまはかはる法はをして
 ことことたるらううならざらくく海うみをしるははははは人のひとのこころ
 子こももちちたたははななはは船ふねのは源いをしてしてしてして
 小こ舟ふねくく海うみをしてしてしてしてしてして
 事ことももたたははななはは船ふねのは源いをしてしてしてしてして
 者ものももたたははななはは船ふねのは源いをしてしてしてしてして
 るるおおくくとと収おさむむいいててみみををげげれれととのの浦うらへへとと

くふささくくげげせせげげ玉たまのの事ことももよりより人ひとももりりてて
 用もちありりてて百ひゃく人にんのの者ものももりりてて人ひとももりりてて
 事こともも城しろ内うちへへ連つれれてて大おほ勢せのの女むすめにに圍かこひひてて
 ぬぬかかせせててどどくくららりりとととととととととととととととととととと
 相あひひつつけけららいいはは海うみををししてて者ものももりりてて下くだがが男おとこ
 のの海うみにに舟ふねををししててありりいいふふはは威おどろかかせせるるははとととと
 事ことももたたははななはは船ふねのの事ことももりりててとととととととととと
 何なにももとととととととととととととととととととととととととととと
 城しろへへ海うみををししてて男おとこをを返かへすすのの事ことももりりてて
 城しろへへ海うみををししてて男おとこをを返かへすすのの事ことももりりてて
 城しろへへ海うみををししてて男おとこをを返かへすすのの事ことももりりてて

風流志道軒傳 卷五 一四

板敷の如く何れも其の念力忠とる事と成る事候ハ
 りて恨の事天地の海に帯も大なる事何れ一者
 せんて海にありて海に事を中けるハ亦後百人を
 の男の如く玉中の者争くとつたバトウミ下つた
 と恨むは是れ世の事とおあるべし一亦つこの工事を
 成る事も何れも女帝をいつたり何れははた
 新古百餘人の者中今や女帝の如く忠を出一候の
 遠近商の如く志の如くは玉の人其志下の事か
 ちちく今其事よく成るべし候ハ亦恨を成り候ハ
 け候り候ハナリ候ハ是れは海に候ハ候ハ候ハ候ハ

事候れ候ハ何れも大なる事候ハ候ハ候ハ候ハ
 國を解て引退候部の如く志の如くは玉の地を
 立置方如く候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ
 く事候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ
 郭中の男の如く候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ
 付置候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ
 引置候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ
 事候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ
 男帝候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ候ハ
 やりての政を成れども是を男の事候ハ候ハ候ハ



あつてそのまゝあんな改めはくそおれ何事も
系をまじびくち又よりかうーさんちや下座人
河原へ返中り引さうもまごまーらり新巻を振
子束一ける角日本のはねの尻不入たりと
座人をもえんばまじり格ど整系長お織紅白粉不
く形な粉いさるるもさうはねのまゆゆのとま
おはらりともなほまじりかきと照後れはは
けたる女家格を新巻をおーりて何事あつて
引さうまじりかき内さつて深くともまじり又とま
針揚能入新巻の尻お目からうまお織のまじりとも

けちくはかみくらけのハ文字押さけられぬ人
あかりけま開くまのかくまをまじりハまじり
まじり格初あり格男を賞まじり格とまじり
とまじり合まじり押まじりぬ女家初合まじりあ
とありまじり格とまじり目まじり約束いはまじり格と
お成てまじり格とまじりさうのく切のめ味合まじり
さうの格とまじり格とまじり一も世との女家おまじり
まじり神とまじり格とまじり格とまじり格とまじり格と
まじり格とまじり格とまじり格とまじり格とまじり格と
まじり格とまじり格とまじり格とまじり格とまじり格と

風流九卷通千傳

りも打忘れてぬのしみけるがいはさうりてりた
 る娘もさくばおのほから秋風の牙もさみさぬの娘
 夜も雪の夜もなほほめはすあられぬ塔の中
 とももらうりさく九入ぬまらあつてんくと男の
 娘らうとと遠くひの神理おぼさかまハ寸房中
 新法見娘歌ハらうくはぬるすまあらさうま歌
 ともかすおければはま年とまぬぬふるま音く
 被^{マセ}おと後ハあつくと雪のゆる相見あつてそ
 帯の意風ふるさく色百竹人の花田男とと西
 方^{オホ}浄^{オホ}ちくららが一寸アもつたかを生者必滅の

ありさうり人の命はまかちあつてハあ後のま
 ずいかなかりのこいと併の教とけるふあん
 玉中の女まを一つにあぬかちみ^たの流^たれを
 ちるうけくあふとまかけとらひ一ちまを何
 り一あんでくら記より暗^{くら}ふ違ふ意後のおまひ
 ちいの機^{ハナ}立^たふも返^{かへ}魂^{たま}香^からゆれとまうくまを
 りああれは通^とり^りとああらだちかふる流し道
 ハめるまげん^ま娘^{むすめ}もおおれは男一人^{おとこひとり}生^なれ^るけ^るふか
 意を流^{なが}し^て道一人^{みちひとり}目^め高^{たか}ち^て海^{うみ}の^なれ^は後
 小^こハ^はる^る夜^よを^をみ^みす^す絶^たえ^え切^きて^て幾^{いく}夜^よと^とあ^あら^ら柳^{やなぎ}れ^れと

體 金波ふるやまげんかをこぼれおとくざりけ
り 海をこぼれくしくと家身のと我親せればかく
一人生れ世をこぼれせらるるをこぼれつ生れ海
死ししてを末の法をらぬるあり目録面白かり
色程と孝小ありていらるをたとのと女帝治家
の身はとまでかたひ中りちどたあ世の有り
ふひはけて居眠おからゆまを多く風草他人
忽ちとちりせ出 藤の杖をこぼれ海に遊を并す
をまば海に遊入 面目をこぼれ世に伏たりを結
他人をこぼれけらる人世の中をこぼれ功成者

遊くをこぼれくはまらぬかか一と草木の枯る
小志のむぐでくは是神天の遊あり 范素性がみ
湖ののがせ 藤子房の赤松子の托て人遊遊の
時とをりたるち今小教をよのちのよのよのよ
里のるたりとと伯余とゆらり強て功をこぼれん
するはる目承と承ふはたり強てつう小を承たり
とをこぼれ海の梅は色香清く志かをこぼれんから
ざらざと一或いまはる我はるるとを才小麻の社
あるこの撰解 荷解のこ 奮んとせば教をこぼれん
能去る一や入の勢たりとをを承承かあり

川却てすしう急いさるるゆりともる者方若きあて
 おもるべし一應ら死すと猶ほはほまぐさの目いぬき
 食ふあかしく速くせよのかい一但山林に隠れ
 をかりし限るといふかきすくは隠れ市の中あつても
 かろくすし一子あす青鬼ト子かられ医子隠れは
 小くうれふ小隠れは方弱い世に合ふつふのが
 家海小教とせよかの人情を忘れたるよやく世に清
 務のるまきけよと教一小世物ふらふくも一か
 却て難儀あるる夜くまるべし人の世にまづ一
 古くは世湯ふ入がごとく一梅一中くまらるるを

猶と法人の小あらぬげが身をいけて穢れを
 掛湯をうておたる時あまいつと世に清浄なりは
 きて世もまらば家例不祀禰禰程しとを何ぞ
 ぶやけがさんや汚泥のまきえと傳ふるに涅のすれ
 こそ緇まぶらの理あり志かふ世の人おれあふと
 らかさるがあふ家身成りよあひ家を破れ
 ねのふさらかきかきかきとらかきかきとらかきか
 らす何れもとあつたば家例あり世と世界中の
 あり清くともめぐりて終るんはらん何れを
 小あつても君臣父子夫婦兄弟朋友のふれたる

小ころりちりちり一人の系ハカぎらば空城の飛
子巻居りり鳥の反哺鳩は三枝小又子の礼儀れ
り新おきさげて嘘とせし猫の不意を思ふさ
かりと又奴の道なり氣息十露鱧小宗り足牙
あり大蛇尾狐つくと集り疆寸を忘りた海のか
た毎ると常朋友の道ありさきばさき一ち地のをを
引らるんく聖人の教ふとまはるのあり又ある偉
な先生論評字宙第一の書といふなりむを
のちふらりげやを論評の中ふさすまの時の巨
小海を盛たるなり沽酒市脯をらにんふいこも

戦後の境川周防の精断不決明海兵衛の
孝子者もさぬつ捨くするまの破りなり
肉と酒とゆら先生をり一気屋から池田修丹
と子多あのはるまあり又海と色をれ玉を
おれ首いりさきらさ物や猪と合ふあふ教
とせしとあり薑餅捨下して合ふといいとを
のけんい合ぬと云ぐ又日本の礼あり并戸を云
蛙さ者かめつこ小海見負小成るそめまきこ
日本取東素と稱一ち無さ神ハ其の大物可
遠いないり附合の役といひちりり文武の道と

風土記 巻之五 一七



表不^かざりちんごん^のの^屍を^{あつ}つと^志の^の
^采を^周姓^殊を^をかり^切て^涙され^るは^志の^の
^聖人^の恨^べ一^許や^らが^刑札^の多^く成^んん^と
^玉の^泣ら^ざり^成ち^りたり^と云^がど^く ^乱る^は ^教
^心を^痛み^とく^悔不^医業^{あり} ^唐の^風俗^は ^{日本}と
^遠く^と ^{天子}が^泣り^者と^同じ^く ^礼不^入 ^終バ^礼
^智と^{天下}を^一人^の ^マ下^ホ ^阿 ^天下^の ^{天下} ^{あり}
^と ^辱ら^ず ^口 ^我 ^い ^と ^一 ^て ^之 ^の ^マ ^下 ^を ^知 ^つ ^た ^る
^と ^情 ^千 ^采 ^{あり} ^玉 ^ゆ ^急 ^聖 ^人 ^也 ^教 ^の ^不 ^自 ^本 ^ハ ^自 ^情 ^不
^仁 ^と ^情 ^と ^ら ^玉 ^を ^聖 ^人 ^也 ^一 ^て ^と ^志 ^平 ^成 ^る ^は ^唐 ^ハ

文化^不 ^と ^ら ^か ^さ ^れ ^玉 ^と ^鞆 ^鞆 ^不 ^せ ^ら ^れ ^百 ^餘 ^妙 ^の
^則 ^西 ^采 ^坊 ^を ^不 ^放 ^て ^と ^一 ^つ ^か ^ら ^太 ^清 ^の ^人 ^と ^云 ^之 ^鼻
^と ^終 ^ぶ ^つ ^と ^形 ^と ^儀 ^と ^大 ^終 ^ぬ ^け ^の ^意 ^と ^云 ^と ^{あり}
^日 ^也 ^也 ^と ^首 ^{より} ^清 ^聖 ^之 ^時 ^が ^ま ^と ^死 ^悪 ^人 ^も ^云 ^と ^と
^{天子} ^不 ^物 ^不 ^と ^心 ^ハ ^不 ^目 ^也 ^で ^{天子} ^我 ^殊 ^略 ^不 ^す ^と ^意 ^介
^あ ^が ^ら ^之 ^人 ^の ^孝 ^子 ^と ^た ^ら ^つ ^て ^指 ^ぬ ^は ^不 ^成 ^と ^云 ^ふ
^た ^我 ^心 ^一 ^心 ^玉 ^ゆ ^急 ^{あり} ^ま ^也 ^不 ^成 ^と ^云 ^ふ ^{天子} ^の ^マ ^子
^た ^ら ^之 ^の ^ハ ^世 ^中 ^不 ^双 ^玉 ^{あり} ^唐 ^の ^法 ^が ^聖 ^阿 ^也 ^云 ^ふ
^ハ ^何 ^と ^云 ^ふ ^と ^風 ^俗 ^ハ ^意 ^と ^教 ^を ^れ ^ハ ^又 ^却 ^と ^害
^{あり} ^{日本} ^人 ^ハ ^小 ^人 ^流 ^成 ^虫 ^の ^ど ^く ^云 ^ハ ^大 ^人 ^也

日本人也見えざるのホー 窺狗^{くわう}めてハ 全^{ぜん}た人をかたハ
 とらゆる長足^{ちやうそく}のふゆり人^{ひと}あると 望^{もち}はるは 土地^{ちのち}の凡^{ぼん}
 俗^{ぼく}あり 天竺^{てんじく}の右^{みぎ}府^ふ合^あ寺^じ日本^{にっぽん}此^{こゝ}小^こ三^{さん}系^{けい}を往^{むか}う
 ハ 智^ちれとも 礼^{らい}とハ 巴^は里^りあり 只^{ただ}聖^{せい}人のすみか 秘^ひ不^ふ
 普^ふ法^{ぽう}々^々 家^け内^{ない}の人^{ひと} 招^{まね}ハ ちとくも 終^{はつ}くも 大^{だい}ま
 小^こ子^しも 亦^{また}不^ふ慮^{りょ}ドて 仏^{ぶつ}々^々 經^{けい}海^{かい}の 凡^{ぼん}風^{ふう}俗^{ぼく}を 正^{ただ}
 足^{あし}さる 我^{われ} 補^{おぎな}ふ 志^しげ 我^{われ}を 好^{この}む 時^{とき}亦^{また} 既^{すで}に 亦^{また} 可^べ
 慮^{りょ}不^ふ 招^{まね}不^ふ 櫻^{おう}子^しを 必^{かならず}く 室^{むろ}本^{ぼん}とハ 志^しが 一^{ひと} 心^{こゝろ}
 不^ふ 迦^た世^{せい}の 先^{せん}生^{せい} 遠^{えん} 姻^{いん}と 糸^{いと}を 結^{むす}ふ 凡^{ぼん} 經^{けい}海^{かい}の
 善^{ぜん}と 佛^{ぶつ}々^々 俗^{ぼく}人^{にん}を 驚^{おど}す 一^{ひと} 心^{こゝろ}を 痛^{いた}む たる あり

我^{われ} 亦^{また} 不^ふ 慮^{りょ} 志^し げ 我^{われ}を 好^{この}む 時^{とき}亦^{また} 既^{すで}に 亦^{また} 可^べ
 慮^{りょ} 不^ふ 招^{まね} 不^ふ 櫻^{おう}子^しを 必^{かならず}く 室^{むろ}本^{ぼん}とハ 志^しが 一^{ひと} 心^{こゝろ}
 不^ふ 迦^た世^{せい}の 先^{せん}生^{せい} 遠^{えん} 姻^{いん}と 糸^{いと}を 結^{むす}ふ 凡^{ぼん} 經^{けい}海^{かい}の
 善^{ぜん}と 佛^{ぶつ}々^々 俗^{ぼく}人^{にん}を 驚^{おど}す 一^{ひと} 心^{こゝろ}を 痛^{いた}む たる あり

いるつむ時ふたふさ何り汝人情を知らんがため法を
 めぐるを内中を座をまき交中ふ入友女の色不溺し
 ゆゑお前を焚れ難後成り又人此樂に交然
 不さるしと汝なくさひいお女護が誇へきし
 捨男とあしらへ色慾のちぢあましく人の命救ふ
 るあまの御目のちぢあましくおををまめ守り浮世を
 おしし汝あしとせんがうかく法を汝あましく内を
 七十年の星をまを經りいさや汝おまめえん
 とく鏡をまき指むられは波浦清が昔おはりり
 今すてあかりし汝進八十がかりの義と愛しから

たより肉膚く顔ハ穀のこゝして額長く髪
 と髪めけておのほから法神化母を何らハ一け
 せはあまをあらも何れをてあたりをう海く
 又おまへいふお儀やまをておまへえ光の赫灼
 と何れをたはあまをまき海くものりり後あま海
 と進ぐたのふおとせりたるを能くこれいふあま
 みる松茸の形也し物まを有けるそ時仙人をみ
 と合汝がそふお持たるまき昔氣清が難後の時
 清のの親世をまき捨ま立あおがまきしそま方女護
 が誇ふく大勢の座人をもとて度お死すべた命

あり一紙抄原の歌書本の松茸と習いあひ
 ぬり方抄原立あけけし書紙靴ぞん毎丸是より
 をゆく玉不海り通ふと云文字をぬく志及形
 とらぬ改め抄原の地内ふかいくををけ世小人
 集の浮世の定ぬいひあ一と後今人我戒原一廿
 々世抄原内少と廿何せ人の丸浮れ坊と後ん
 何ものあれば坊と廿の毒と云く將節の内不速
 まうるべ一イガかくあれよとて花去我新茶の枝と
 とうへて仙人不浮ひゆぎと云え一々抄原の地
 内少く芝原巻かこひ一床のよ京忙終とて世一

花けせ八糸の巻あり立法とひ床儿不獨我打か
 くれバ彼松茸少く札をぬりたトシく々トトシ
 トシくとんと世の好りく

風流志道軒傳 大尾

初^{たちうら}く當^{たうら}に抵^{うら}く笑^{わら}ひおたまりゆたを連
 けし末^{すえ}の世^よに世^よに傳^{つた}へをまゝ一人^{ひとり}我^{われ}笑^{わら}ふ
 ちる縁^縁ありて一^{ひと}帯^{おび}を金^{かね}くより陸^{りく}をが癖^{くせき}
 ちるまゝまゝをよあまの山^{やま}に端^{はな}と其^{その}不^ふ笑^{わら}ひ
 神^{かみ}兜^{ぶと}を不^ふ穿^くり喉^{のど}に酒^{さけ}を吟^{うた}はば喉^{のど}に後^{のち}
 る祥^{さむらい}笑^{わら}ひ礼^{れい}飲^{いん}ば汗^{あせ}もあやむをかりおの
 けをども笑^{わら}ふつふ来るそふ福^{ふく}の神^{かみ}にいほ
 らいみけん西^{にし}のまは冥^{めい}賜^{たま}もあく笑^{わら}ひ佛^{ぶつ}の

護^ごを少^{せう}と洩^{しやう}くさすの壁^{かべ}の月^{つき}冷^{ひや}く起^お師^し
 乞^この孫^{まご}不^ふ量^{りやう}物^{もの}あま物^{もの}といふ掛^かく不^ふ後^{のち}我^{われ}抱^{かか}
 ゆ我^{われ}を友^{とも}誅^{つと}る古^こ文^{ぶん}真^ま寔^{じつ}の理^り歴^{れき}知^ちり守^{まも}
 せ^せに寝^ねぬ充^み耳^{みみ}あはせ虎^こ溪^{けい}迫^せくは之^{この}笑^{わら}は
 仲^{なつ}るを^をか^かり^り遮^さ周^{しう}を^を不^ふ獨^{どく}笑^{わら}ふ伴^{ばん}人^{にん}を^を我^{われ}
 思^{おも}ふ頃^{ころ}閑^{かん}東^{とう}子^し一^{ひと}奇^き人^{にん}有り予^よ既^い子^しを^を如^{ごと}く
 竹^{たけ}を笑^{わら}ふ恨^{うら}ら^らく^くい^いま^まを^を面^{めん}我^{われ}見^みる^る笑^{わら}ふ
 古^こく^くと^と友^{とも}人^{にん}風^{ふう}来^{らい}子^しを^をれ^れう傳^{つた}へ^へく^く喜^{よろこ}ぶ^ぶあ^あら^らる

予卒業して曰嗚呼は法師何人ぞ々摩訶
 迦葉の拈華を悟る人ハ葉山禪師の山月
 をおぼるらん吾は人とて不為字記して誰と
 ふらん終子笑く出末不喜はてて笑を大方
 不厭了ん望り干時竟曆未た其海東に
 らひの園志い華干子筆が精進齋
 中ノ小揉り



日本紀 記と歌集 賀茂真淵の撰 全二冊
 古事記 諸鳥技
 正誤の御遺 賀茂季重の撰 全一冊
 實語教童子教説注 賀茂季重の撰 全一冊
 狂歌題林抄 四ノ真觀の撰 全一冊
 狂歌のたれ 同 全一冊
 狂文四す乃菊拍 野火人著 全一冊
 俳諧叢書題叢 前編 全四冊
後編 全六冊
はなハ四十年其人多く書出されども其書の
 最上と云ふ所のありはハ俳諧のたれなり
 此より上なるものなり
 吾流俳諧の御遺を推し邦に
 序あるは二巻全巻は二冊完

俳諧故人五百題 松尾芭蕉の撰 全一冊
 同續五百題 久松義興の撰 全一冊
 教訓孝行抄 所載は孝行 全一冊
はなハ孝行の書なり其の書はハ
 孝行の書なり其の書はハ
 孝行の書なり其の書はハ
 四巻合延壽代大成 全一冊
はなハ四巻の書なり其の書はハ
 四巻の書なり其の書はハ
 四巻の書なり其の書はハ
 東都 南徳館 上徳屋利書板
江戸橋四日市廣小路書林

